



地域が守る 棚田の保全 と活用

第1
分科会

コーディネーター：沢畑 亨氏(熊本県水保庁 愛林館館長)
サブ・コーディネーター：徳野貞雄氏(熊本大学文学部地域社会学教授)
話題提供者 中園俊之氏(熊本九州自然環境研究所所長)
原田利一氏(山都町・峰集落)
野口慎吾氏(山都町出身 熊本県有機農業研究会)
堀 良輝氏(菅棚田オーナー・熊本市)

居住者だけに限らないむらびりの進行中

コーディネーター 沢畑 亨

私の分科会では、参加者がそれぞれの場所で一明日からまた頑張ることという気になることをめざしました。私が進行役で、山都町に何度も調査している徳野教授を相談役に迎えました。

最初は中国さんで、野生動物に対して人間が実質的に餌付けをしている実態を自覚する必要があるということ述べましたが、一人一人の対応はもちろん必要ですが、集落全体で対策をしなければ、結局野生動物を呼び寄せることになります。まとまった対策が必要です。

次に、海外で農業協力をした後には地元山都町に帰って農業を営む野口さん。最近まとめた博士論文の研究をもとに、ご自分の実践も交えて面白い話でした。竹の粉を活用する方法を模索中で、うまく行くことを応援したくなりました。

3番目は山都町峰地区の原田さん。山都町はそれではあるけど、熊本市に近い地区で、布田保之助の作った福良井手などの地区の資源を活かして、集落営農を行うとやら、婚活イベントや農地の貸し出しなどを積極的にやっているみたいです。徳野教授の調査では、農繁期には降出身者が田畑の手伝いに帰ってくる例も多く、居住者だけに限らないむらびりは実際に進行中なのです。

最後は、棚田オーナーとして菅地区に通う皆さんです。堀さんはその中で、

平成8年の発定当初からの参加者で、十分に楽しんでいて一方で、オーナー制度が地元の負担になっているのではないかと心配していました。でも、地元の方々は交流を楽しんでいるということによって、さらに、オーナーの間からは菅さんというスーパースターが登場し、菅地区の農産物を運んで熊本市で売ったり、農村フェスタの運営にまで携わったりしています。

翌日の棚田見学で一部の皆さんはご覧になったように、オーナーがおもてなしにも参加していましたから、地元のためにも十分に役だっているのではありません。徳野教授の調査では、受け入れる地元は力と労力を使って満足を得ているわけですから「これは新しい祭りじゃ。祭りに経済性はいらんわい。」ということでした。

徳野教授の最後のまとめでは、個人ではなく家族が農地を耕している、家族は同居しなくても家族であるといった点が強調されました。

この分科会では、地元の間人が事例を発表し、よそから来た人が感想を述べたり意見を言ったりして、話が弾みました。事務局による発表者の人選は大変良かったと思います。進行役の人選も良かったと誰か思っていたら幸いです。

参加者 有意義だった 第1分科会

船木孝則

私田県農山村振興課 調整・地域活性化班

第1分科会は沢畑氏、徳野氏の両コーディネーターの巧みな話術や話題提供で実際の棚田オーナーの意見が聞けるなど大変有意義なものであった。

今回のサミットは、秋田県における中山間地域の新たな地域づくり手法の参考とするため出席させていただいたが、全国の実践者の方々の熱い思いに触れ、改めて農山村の価値を再確認するとともに、コーディネーターが述べた「中山間地域の農業にあって同居している人だけが担い手ではない」との指摘は家族の繋がりに関しては考えさせられた。また、棚田の活用は多様な形態が考えられるが、保全については仕組みづくりが非常に難しいと感じた。

最後に、棚田オーナー制度の実践者が笑顔で語った「儲かりません、でも楽しんでます！」との言葉が心揺さぶりで、地域と共に楽しみながら活動をサポートしていきたいと強く思った。



(第1分科会写真：山都町)